

平成25年度第2回 CCC コミュニケーション関係学グループ運営委員会 議事概要

I. 日 時：平成26年3月6日（木）18：00～20：00

II. 場 所：私立大学情報教育協会 事務局 会議室

III. 出席者：北根委員、阿部委員、鈴木委員

事務局：井端事務局長、森下

IV. 資料

- 資料① 平成25年度FD/ICT活用研究委員会の活動計画
- 資料② 次回までの課題
- 資料③ 教育改善モデルへのアンケート結果
- 参考1 大学の卒業認定厳しく（新聞情報）
- 参考2 高等学校教育と大学教育との接続・大学入学者選抜の在り方について（第四次提言）
- 参考3 教授会の権限、4項目に（新聞情報）
- 参考4 授業に「タブレット革命」（新聞情報）
- 参考5 FSP 実践講座の授業内容と運営の工夫（Future Skills Project 研究会活動報告）
- 参考6 私立大学等改革総合支援事業 配点区分表
- 参考7 ムーク（MOOC）と反転授業がもたらす学びの変革～米国サンノゼ州立大学の挑戦～
- 参考8 大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準家政学分野

V. 議事内容

① アンケートの結果を踏まえた教育改善モデルの課題の明確化について

前回、アンケートの結果を踏まえて教育改善モデルの内容を修正したが、それにさらに修正があるか検討したが、前回の修正内容について改めて確認し、それ以上の修正は必要無いことが確認された。

② 課題を踏まえた次年度（平成26年度）からの具体的研究について

課題を踏まえた次年度以降の研究について、以下のような意見などが述べられた。

②-1 大学教育を取り巻く現状等について、事務局から主に以下のような点が述べられた。

- ・ どの大学においても、主体性を育む教育、主体性を身につけさせる教育を目指す動きが出てきており、従来の大学教育の枠組みを変えていく必要がある段階に来ている。
- ・ 大学教育における学士力を明確化し、学士力をはじめとする大学における学びについて、学生にとって見えやすく提示し、学士力に基づいた教育課程の体系化をする必要がある。また、例えば、シラバスの中に、授業の前に準備すべき学修の方法、授業後の学習の確認といった内容を入れ込むなど、学生が自発的に学びができるような工程を見えるようにすると共に、シラバスを教員同士でチェックしたり、学生の学修行動についてIRを用いた評価で確認するなどの必要が出てきている。
- ・ 以上のような、主体性を育む教育と教育を支える環境整備については、大学の学長を中心とする共学のマネジメントを強化して行われる必要があるし、そのような段階に来ている。これは、例えば、大学に向けられる助成金との連動によっても示されている。
- ・ 私情協としては、主体性を育む教育について、アクティブ・ラーニングの実践方法などに関するケーススタディについて議論する必要があると考えている。
- ・ コミュニケーション関係学グループ運営委員会における課題として、通常の委員会だけではなく、アクティブ・ラーニングなど、主体的な学修を促す方法について、有志の先生方に集まってもらい、主体的な学修の実践を鼓舞するための研究と情報交換を行う「対話集会」を催すことを検討することが挙げられる。

②-2 事務局長による現状報告等に基づき、以下のような意見や議論がなされた。

- ・ アメリカのある大学生の話によると、例えば、経営学に関する学部では、学部の教員が自ら会社を経営しており、自ら経営する会社のリソースを提供して、インターンシップをはじめとする大学外の世

界との連携を図っているという。日本の大学の場合、このような大学外との連携のレベルが違いすぎるし、教員の意識も異なっているという現状がある。

- ・ 実社会との連携について、「社会に出てすぐに役に立つ」といった観点からの議論を安易にしないことも大事なことである。また、大学の置かれている立場によって、社会人養成的な職業訓練的なことを学修の中心とするか、教養的なことを中心とするか、軸足の置き方が異なるだろう。
- ・ いずれにせよ、大学の中にあるリソースでは限界があり、授業内容もさることながら、学生の主体的な学びを引き出す授業の方法について議論する必要がある。
 - ・ 授業方法と関連して、主体的な学びを引き出す授業を展開するに当たって、シラバスへの反映方法はもちろん、学事的なレベルでの授業の開講方法など、既存の大学の制度を超えた方法が必要となってくる。そのためには、例えば、授業科目数そのものを減らして1科目に費やす学びの濃度を上げる、などのような、大学全体での取り組みが必要となるだろう。

②-3 来年度の課題に向けて

来年度の、来年度の課題について、意見交換を行う方法について、以下のようなこと意見として確認をした。

- ・ 「コミュニケーション関係学」の分野は、そもそも主体的な学びを引き出す授業方法、アクティブ・ラーニングを取り入れることが、ある程度前提になっているところもあるので、「コミュニケーション関係学」に関連する先生方に、既存の事例でいいので、実践例を発信してもらう。
- ・ 実践例を発信する場として、「対話集会」のようなものを開催することを計画する。また、それに向けた取り組みを行う。